

津島市天王通り再生プラン - 「見え隠れ」と「縁結び」

「見え隠れ」

津島駅から津島神社に向かう天王通りは、現在、かつての参道の面影が建物が点々と残りながらも、建物を替えて空き地化で、地方のどこにでもある街並みとなり、絶望的イメージにも、他から差別化されるいちばんの特長である参道空間としての魅力にも欠けています。

ここで提案する「見え隠れ」という手法は、参道空間として「見せるべきところ」とそれ以外のところを「見え隠れ」で修景し、表していた参道空間を表現させるものである。

大英博物館所蔵の「尾張津島天王祭図屏風」では、祭りの見せ（まきわら船）の風景を中心に据え、それを隠す修景めぐみ、回りの他の風景を背景に省略している。『見せるべきところ』・『見え隠れ』の手法で強調するのは、絵巻物でも祭典の日本美術の典型的な構成だが、津島では江戸時代にその秀逸な例に遡ることのできる手法なのである。

具体的には、「大鳥居」「幻の鳥居」「萬木の植栽」など、電柱や電線などの景観害を見え隠れさせ、直接道路の単調な景観にリズムをつくり、ベースペティフ方向の修景を行う。

街並み平行な方向では、「抹木鉢」「霞台」「のれん」「外屋」「灯」「幻」「千幟」など、修道にふさわしい感じ仕掛けが、伝統的木造建築、看板建築などを見え隠れさせ、後退させる。建物を大きく改変せず、付加可能、取り替え可能な仕掛けは、コスト抑え、既存モニタの活用等しながら、参道らしい空間に変える。これらの小さな仕掛けは、背後で世話を管理する人を暗示し、人の気配の街の活性化向上させる。

一つの仕掛けに支配され、盛漬を委ねるのではなく、さまざまなスケールのさまざまな仕掛けの相乗が、連続と多样性を生み、一つの仕掛けが成功しなくとも、他のが補える仕組みとなる。

津島市役所の「見え隠れ」の実験結果

津島市役所の「見え隠れ」の実験結果